

養成校の取組により退学防止ができたケース

分類		退学しそうなことどのように気付いたか	退学が想定された理由	学校の対応	学校の対応の結果	退学を防止できた要因	養成校種別	
学内要因による理由	意欲の低下	1年生で、12月頃の介護実習中に巡回指導の際、実習内容におけるマイナスイメージの多い発言を繰り返しており、個人面談をおこなったところ実習先の職員から指導内容に関して不満を漏らしていたことがあり、そのまま介護分野ではあまり働くイメージが持てなくなった。	本人の面談で、介護分野で働くことへのイメージが持てなくなっており、介護分野へ気持ちが向かわなくなりました。	担任とその他の教員で個人面談や親との面談を行ったり、介護実習先施設にもヒアリングを行い、本人の状況確認や指導内容について意見交換を実施した。	もう一度、介護実習を実施し、現在はクラスのムードメーカーとして学業に励んでいる。	学生の考えを聞き取り、様々な視点や物事を多目的に考えていくように指導した結果、考え方が広がり、介護実習に取り組む意欲を引き出したことによるものと考えられる。	専門学校	
		介護福祉士と社会福祉士の両資格を目指す2年生で、介護実習Ⅰを終えた後、介護福祉士課程専門科目授業の参加状況は悪くなった。社会福祉士課程専門科目は参加していた。	実習を通じて、介護福祉士資格取得に係る意欲が低下したことが想定された。	本人と面談し、欠席している原因と現在の当該学生の思い、考えといった状況を確認。	課程への在籍を継続し、授業への参加も再開した。	当該学生は入学当初より、資格取得について、社会福祉士を優先した考えを持っていた。また、介護実習を通じて、自分自身の技術、知識の未熟さを実感し、自信が喪失した状況となっていた。そこで、①今後の指定科目（講義、演習）の内容を説明し、知識、技術の修得、涵養できる機会がカリキュラム上確保していることを説明②介護福祉士資格に係る社会的意義、就職活動或いは就職後の資格手当等に係る優位性を改めて説明。その結果、課程所属継続に繋がった。	大学	
		実習後の記録提出が期限までに行えず、授業の欠席が連続するようになり、担当教員が連絡しても応答が遅れたり、応答がない日が増えた。	面談したところ、介護福祉の仕事に対する意欲が薄れてしまった。しかし資格はできれば取得したいと話していた（保護者に資格取得はするように言われているため）。	資格取得の気持ちはあるため、友人からも声かけをしてもらい、教員からの連絡も続けた。	その後、欠席回数が多くなり、必要な単位取得ができなかった。教員からの連絡に応答がなくなったため、学生支援課からも連絡をとってもらった。生活リズムが崩れてしまい、登校できなくなったことであった。辞めたい気持ちもあるが、介護福祉士の資格を取得したい気持ちも残っていることと、半年間「休学」をすることとなった。現時点では退学（コースから外れる）にはなっておらず、復学できることを期待している。	現時点では退学とはなっていないが、「休学中」であるため、退学防止できたかどうかの判断は難しい状況です。	大学	
	学校が提供している教育への興味関心の低下	授業の欠席、課題の未提出が増えたりすること。学生の話や教員の話から把握した。	授業への興味関心が薄れた。授業の負担感が強まった。	興味関心を促すような事例や現状を授業に取り入れた負担感の程度の把握を無記名調査等にて行い（在籍学生全員に対し）、負担感の程度を把握した上で、課題の出し方や頻度を調整した	負担感の軽減につながり、学修を継続してみようという意識に変容できた	定期・不定期に学生の様子について情報を収集し、専任教員等で共有を図った。情報の共有後、役割を分担し、それぞれの教員からアプローチを展開させた。アプローチの展開方法や進捗、学生の変化等についても、情報を共有させた。	大学	
		意欲的に臨んでいた学生が、長期休暇後急に周囲とコミュニケーションをとらなくなった	長期休暇中に、高校の同級生と会い、自分を見失い退学を迷い出す	個別面談及び、仲の良いグループのメンバーとの話し合い、更に保護者にも協力をいただき、モチベーションを高める	仲の良いグループ以外にも会話ができるようになり、意欲も見られるようになる	早期に異変に気付き、学生の特性を把握し、適切な友人の選択ができたこと、また、関わりの中から必要な存在であるということを理解してもらえたことが功を奏したと考える	専門学校	
	友人が退学したことによる意欲の低下	2年生で授業の欠席が多くなり、学校に来てくてもクラスの友達と話すことが少なくなり、休み時間はいつも携帯でゲームをしていて一人でいることが多くなった。	面談の結果、本人の仲がよかった友達が、進路変更のため学校を退学してから学校に来たくない話す。	本人と何回となく面談を行い、今後のことを話し合う。欠席の多いときは、自宅訪問する。授業の遅れに関しては個別指導した。	卒業後は、介護福祉士として仕事をしている。	教員との話もよく理解してくれ、自分の将来のことをよく考えたうえで、卒後は介護福祉士として、日本で仕事をしていきたいと希望し学校を続けることを決めた。	専門学校	
	成績不良	コロナ感染症にかかり出校停止が明けても体調不良を訴え引き続き公欠として欠席していたが、あまりに欠席が長く単位に関わりそうだったのであらためて体調確認をしたところ異変を感じた。	学習の遅れによる孤立、授業についていけない	担任より保護者に連絡し、状況を共有。とにかく登校しよう説得。登校後、即面談を実施し気持ちを受けとめた。ワンワンと泣いたが、最後まで一緒にいて対応した。その後の学内教員の授業でグループワークを実施し、クラスメイトからの励ましを受けた。	少しずつ退学を考えていた気持ちが学校を続けて頑張ろう、に切り替わっていった。寝坊をよくする学生であったが、定期試験対策として、クラスメイトを自宅に泊め、一緒に勉強し定期試験に望んでいた。表情も明るくなった。	家族、クラスメイトを巻き込み、一体感を感じさせたことが良かったのではないかと。教員ではなく、クラスメイトに促し、クラスで定期試験対策、最終的にクラスメイトと試験前日に一緒に取組んだことが良かったのではないかと	専門学校	
	学内の人間関係	学校の教員や職員との関係	2年生の後期の実習時、欠席が増える。	2年生になり後期の実習時、発病し、入院治療の必要があったが、指導教員に何回も相談しても、対応してくれないため、欠席が増える。ほかの教員が学生と連絡を取ると、「退学」の申し出があった。	すぐに会議を、開き、指導教員との信頼関係がないため、他の教員も含めた3人で本人と面談。訴えを傾聴し、学生の抱えている課題を一つずつ解決する。	学生も退学を撤回し、本校で学べて良かったと卒業した。	学生は、社会人なので、今の問題を指導要員に相談していた。指導教員が早期に把握し、会議にかけて対応を話し合っていたら、学生を退学まで追い込まなかったと思う。社会人であったため、指導教員の顔を立てようとした点に無理があり、今後は、話しやすい教員に相談してよいことを全学生に、「この件を境に学生に周知してもらっている。	短期大学
		ほかの学生との人間関係	2年次の実習後から、体調不良という理由により欠席の日数が増えた。欠席が続けば、授業予定の他の科目の欠席と連動することとなり、教員間でもその現状を共有していた。	担任教員を中心に関わりつつ、本人にその理由を確認したところ、クラス内の人間関係に置き、精神的に落ち込み、学業の継続が困難になってきたこととであった。	本人の塞ぎ込んだ表情や精神的な落ち込みについて、まずは本人と対峙しながら、その気持ちについて聴く姿勢をもって関わった。クラス内の人物とは関わりたくないという思いがあるが、一方で介護福祉士の資格取得への意欲は消えていないことがわかった。長期化されることも同時に考え、本人の了解のもと、保護者との連携を図り、家族からの見守り、メンタル面における受診の確認、SSWとの面談等を重層的に行った。	病的な診断も成されたが、学内での集団での授業参加は厳しい側面もあった。このことから、別教室や自宅からのリモートの授業の参加を認めた。また、欠席超過した当該科目に対しては、学内での補講計画を立案し実施することと、現在は本人なりのペースで学習リズムを取り戻しつつある。	本人の状態像に合わせて、医療機関、保護者、学校それぞれの立場で学業が継続できる体制を構築したことで、現在までは退学せず学業に臨んでいる。	専門学校
		クラスに男性学生が少なく、グループの輪に入れず孤立していた。連休明けごろから休みがちになった。	休みがちになり本人とSNSや電話、面談で話を聞き、保護者等との話し合いを何度も繰り返したが、私生活の面でのトラブルも重なり、メンタルが回復せず。その後退学となった。	他の学生にもあらゆる話を聞き（本人が話せる程度に）、また友人の話の輪に入っていけるような環境を作ったり本校としてはできる限りの対策を行った。			短期大学	

養成校の取組により退学防止ができたケース

分類		退学しそうなことにどのように気付いたか	退学が想定された理由	学校の対応	学校の対応の結果	退学を防止できた要因	養成校種別	
学内要因による理由	学外実習の不応	実習に必要な知識・技術・姿勢等の習得がうまくできなかった	1年生GW明けに、欠席の連絡がなく登校しない学生がいた。担任教員からの聞き取りで、実習へのプレッシャーから登校できないとのことであった。	クラスの人間関係で学生同士で不安を共有できる存在がいなかった。実習への緊張感、プレッシャーを解消することが困難であることがわかった。	担任教員が本人と電話で面談、また保護者の方とも連携を図った。他学生も同じ不安を抱えていることを授業内で共有し、人間関係を構築できるようにした。また、実習期間中の夕方等に教員と相談できる体制（電話での不安の解消）等を行った。夏休み等の長期休み期間にも登校できる日を設定した。	他学生とのコミュニケーションを図ることができるようになり、クラス内の人間関係が変化した。1回目の実習を終えたことが自信となり、その後の欠席はなくなった。また、いつでも相談できることを知ったことで通常の授業でも質問をしたり、わからないことを解消しようとする姿勢がみられた。	通信制の高校にいたことから、人間関係を構築することに抵抗があったが、休み明け等の学校への通学が困難になる可能性を想定していた。担任が本人と保護者と話し、他教員が実習等の際のフォローを行うなどの連携を図ることができていた。また、長期休み等の際には、登校できる日を設けることで不摂生な生活状況等を防止し、学習意欲を停滞させないように関わるのができた。本人の変わりたいという意欲もあったことも要因であったと思われる。	専門学校
		実習先においての人間関係がうまくいかなかった	1年生の2～3月に実施された2回目の介護実習で、技術が思うように伸びず施設職員から熱心な指導を受けたが、どんどん元気がなくなっていった。真面目でコツコツと学習するタイプの学生で、いい加減という言葉のように適当なことと折り合いをつけるのが難しいタイプの学生であった。	介護福祉士の仕事が自分には向いていないと感じたようで、実習終了後本人が母親と相談し母親は「自分がしたいようにすればよい」と言ったとのこと、教員に大学を辞めたいと相談があった。しかし、本人が「したいようにする」という内容がきちんとしたビジョンがないように思えた。	母親と本人、教員（コース長）が面談を行い、辞めたい理由を確認し、介護福祉士の資格は取得しなくても短期大学を卒業して「短期大学士」の学位だけでもとったほうがよいと説明を行った。電話での簡単な説明と2回ほどの面談を行い、奨学金の申請等も紹介し、辞めずに2年次1年間通う計画を立てて臨んでもらった。	2年次は他のコースの簿記関係の授業やパソコンスキルを主に選択し、介護福祉コースのゼミナールの授業を通して卒業レポートも制作し、報告会にも参加して卒業できた。自ら積極的に就職活動を行い、自分の納得できる就職先を見つけることができた。	本人のやりたいこと、得意なことを日常の生活ややりとりから教員が把握し、無理やり介護の道に押しとどめるのではなく、また、本人や家族が選択した辞めるという方向をそのまま簡単に認めるのでもなく、納得のできる選択肢をあげて現実と向き合いながら地道な指導を繰り返したことで、退学を免れたと考える。	短期大学
	進路変更	医療・福祉分野以外の新たな分野への進路変更	指導に対して改善が見られず、不満等を家族やクラスメイトにつぶやいていたことを他のクラスメイトから聞きました。	本人と面談し、持っている気持ちを聞いて本人が抱えている不安や不満を確認した。クラスメイトとのコミュニケーションの取り方がわからないこと、目指している将来の職業が福祉分野とは全く違う職種に興味あったことがわかった。	個別面談を適宜行っていく。親とも連携を取りながら不安や不満なことなどを吐き出せる関係性を構築していった。クラスメイトにも特性であることを開示し、協力を得られるように勧めた。	以前よりも不満を口に出すことが減ってきた。欠席や遅刻等も減ってきた。	親や教員との連携を図ったこと。学生の特性に配慮した対応を行っていった。	専門学校
			留学生の男子1年生の後半頃より「勉強についていけない」と本人から相談があった。様子を見ていたが、授業中も集中力がなく、表情も暗い様子が見られた。	本人と面談したところ、学校の勉強についていけないので、退学し、ビジネスの専門学校に行きたいと考えていることがわかった。	勉強は苦手であることは試験結果をみてわかるが、介護福祉士としての資質は感じ取れていたため、補習を受けてでも学業はこなせることを再三提案した。また、バイトがレストランで行っていたため、介護施設へのアルバイト変更を提案した。本人は、介護が嫌になったのではないので、グループ施設でのアルバイトを行うこととなった。	施設でアルバイトをするようになり、利用者からも好かれ、日本語の上達もみられ、学校生活でも明るくなった。	本人の思いをしっかり聴き、介護が嫌いになったわけではないことを把握できたこと。本人の良いところを認め、励ました。また、バイト先の職員や利用者にも好かれ、本人も喜びを感じ、介護のやりがいに気付いた。	専門学校
			授業の遅刻・欠席が続き電話連絡がなくなったことがきっかけで退学を考えているのではないかとわかった。	介護業界に進路を考えない、他の業界に興味をもった。	保護者連絡と個別面談を実施し、介護福祉士の資格を取得し将来活かせるようにしようと説明する。	卒業後の選択しの幅を広げたことで気持ちが楽になり卒業と介護福祉士取得に向けて頑張ることができた。	退学を決めてしまっからのアプローチではなく早めに対処できたこと。	専門学校
			学習態度より、意欲がみられない。クラスメイトとのトラブルがある。	本人と面談実施。そもそも、人と関わること（コミュニケーション力）に苦手さをもっており、進路については保護者の意向に沿った形であり、学生本人はさほど興味は抱いていなかったことが発覚。幾度も保護者とも面談を通じて、初めて学生本人が自分の気持ちを保護者に貫き通し、進路変更という話になり、退学の意向を示された。	学生本人と面談をくり返した。ここでは、福祉（介護）についての学びは、社会に出てからも無駄にはならないことを幾度も伝え、コミュニケーション力については、外部企業の若者サポートステーションと協働し、社会に出てからも活用するよう提案し、社会に出るためには、人との関りの学びも必要であることを伝え、その機会が今の専門学校在学中であるのではないかと説明した。	学生本人は、退学を思いどまり、国試は受けないが介護の勉強は続けるとの意向を示した。また人との関わりについては、外部企業を活用し、自分の悩みを打ち明けようになり、学内でもクラスメイトとのトラブルは激減した。	学生の思いに寄り添う（受容・共感など）姿勢で対応することで、心が開かれたと考えられる。否定せず、学生本人が納得理解できるまで幾度もアクションを起こし、関わったことがよかったと思う。	専門学校
			介護の仕事をしなが資格取得したい	本人からの相談	本人と面談をしたところ、無資格で介護の仕事をしなが資格取得したいとの話があった	保護者を含め面談を実施し、卒業まで頑張ることになった。教科教員にも共有し、随時情報共有を行った。	卒業時には、みんなと同じスタートラインに立たせてもらって感謝しているとの言葉が聞かれた。	保護者の熱意と学校との連携。

養成校の取組により退学防止ができたケース

分類	退学しそうなことどのように気付いたか	退学が想定された理由	学校の対応	学校の対応の結果	退学を防止できた要因	養成校種別	
学外要因による理由	生活習慣の乱れ	1年生の5月頃より、遅刻、欠席が増え、授業にも身に入らないため、他の教員と情報共有を行い、特に午前の授業の欠席が目立ったことから気づく。	本人と面談の上、意見を聴取したところ、生活リズムが夜型になってしまい、朝起きられなくなってしまった。また介護福祉士の授業も難しく、ついていけないということがわかった。	朝毎日のように登校するように促した。また、保護者の協力を得て、家族からのフォローもお願いした。登校時は、できるだけ、本人の悩みを聞くようにして、学校に登校しやすい雰囲気づくりを心掛けた。	少しずつ、登校できるようになり、本人がついていけない科目については補講などを行った結果、何とか遅刻はあるが、欠席するも減り、勉強にも本人なりの努力で乗り越えた。	生活リズムを少しずつ修正するようにご家族とも話し合い、協力できるように進めていき、少しずつ本人が勉強に対しての苦手意識を1つずつの超えられたこと。	専門学校
		入学当初と比べ、授業を受けるときの表情・姿勢に変化があった。 具体的には、提出物などの提出状況やミニテストの結果が悪いなど、勉強面での遅れや授業に集中できないなどが、ほとんどの科目の授業でみられた。	定期的実施している個人面談において、本人に話を聞くと、授業についていけない、アルバイトを優先してしまい、自宅学習がおろそかになっている、友人との新しい関係性の中で、SNSやラインなど相手にあわせてしまい、生活リズムが乱れているなど、複数の理由をあげる場合が多々みられた。	まず何が改善しやすいのか本人と話し合い、ひとつずつ解決を図る事、またご家族にも状況をお伝えし、協力をお願いするなど、本人だけでは解決できないことを踏まえ、取り組みやすいことから、学校と家庭と両方から学生を支援することとした。 また授業などは小テストを取り入れたり、振り返りを行うことでポイントから理解できるようにフォローし、前期テスト後は個別の状況により補講を実施した。 日頃より全教員で言葉かけを行い、早めに気持ちの変化に気づけるようにし、毎朝のミーティングで情報の共有を図り、対応策の統一も図った。	すぐに全てが改善することは難しいが、一つでも成功体験があれば、全体的に改善の方向に向くことが多かったが、家族の協力が得られない事例では、生活そのものの改善が図れないので、どうしても改善できない課題は残った。しかし、授業が進むにつれ、同級生との関係性や授業内容によっては興味を持てるものもみつきり、それを機会に改善につながるということもみられた。	色々な授業や演習、当校独自の開設科目などから、興味をもてたり、成功体験を得たりすることで、介護そのものの興味を失わなかったことが、退学を防止できたと考えられる。	専門学校
	心身の健康や体調の問題	入学当初から、欠席が目立つ学生がいた。	面談すると、学校まで来るのだが校門近くで腹痛が生じてしまい、家に帰ってしまうとのことだった。内科受診しても疾患はなかった。	カウンセリングを受けるように進言し、腹痛が治まったら遅刻をしても良いので教室に入室するようにと伝えた。欠席した日は、本人のLINEや電話で連絡を取った。また、保護者と連絡を取り家庭内でも通学ができるように協力を要請した。前期の出席日数が不足となる時点で半年の休学をし、来年の4月からの復学をも提案した。	本人は、退学をして就職をすることを考えていたが、保護者と担任との話し合いで、休学をすることとなった。	人間関係で高校時全日制から通信制へ転校となり、毎日決められた時間に通学をする習慣から遠ざかっていたため気おくれがあったと思われる。コミュニケーションやクラスの間人間関係は良好であったにもかかわらず登校できない理由は、心療的な原因があるのではないかと考える。そのため学校と距離を置くことで、本人自身ホッとすることができるとして休学の道を選択したものである。	専門学校
	本人の特性	既婚者であり家族滞在資格をもつ配偶者と同居していることは当初からもちろん把握していたが、2年次の夏頃に妊娠したとの相談があった。	本人は、学業を続けたい思いがあるが、卒業することが難しくなるので退学を検討しているとのことであった。	学業を続けたいという思い、介護福祉士として将来は日本で働きたいの思いが一番にあったので、「休学」という選択肢を考え、家族滞在資格を持つ配偶者への対応も併せて出入国在留管理局へ相談し、その内容をできる限り分かりやすく伝えることを心掛け、本人と話し合いの場を持った。	出入国在留管理局から頂いた指示に従って、休学を選択、出産・育児を最優先にしながらも学業を継続することになった。出産後は本国の親に子供を預け、復学し学業に励んでいる。	過去にも妊娠による退学という事例があったが、実習時期を配慮するなどして休学することなく卒業することができた留學生もいる。留學生の妊娠や出産、その場合での学業の継続は在留資格の問題から日本人以上に困難なことも多い。このような場合、一人で抱え込んでしまい事はよくないので、女性教員がさりげなく声をかけるなど学生が相談しに来やすい環境を作ることができるように努めている。	専門学校
	家庭等の状況	遅刻や無断欠席が続く。担任、他の教員から出席授業の様子をヒヤリング、確認。本人、保護者を交えての面談を実施。	高校まで、引きこもり、精神障害などで不登校だったケースが多い。 学校に毎日、登校することがそもそも難しい。しかし、親の希望であることは多い。(手に職をつければ、なんとかなる。)	保護者との3者面談をくり返し実施。 心療内科の受診の紹介・進路変更先の相談 特定技能試験にチャレンジさせたり介護以外の職種に変更し、働ける選択や、他の勉強ができる専門学校を一緒に探す。	休学・進路変更・自主退学		専門学校
		学生からの相談	面談後、家族のために働きたいの思いが聞かれた。	数年にわたり、日本語や専門教科を勉強してきたから、卒業までこのまま頑張ろうと伝え、家族と十分話し合い、理解してもらえるようにする。	残留	卒業後、資格を持ち、安定した収入が見込めるため、本人もモチベーションを保っている。	専門学校
	経済的要因	多くは、授業を休みがちになる。教務課の方でも授業回数が少ない学生をピックアップしてくれる。学科の会議等での情報共有。	本人への連絡、面談等により、他の学生との関係、経済的問題、家庭内の問題等が浮き上がってくる。	学内の人間関係の場合は、関係について工夫する。 学生相談室（カウンセラー）、生活相談室（キャンパスソーシャルワーカー）、学生課、教務課等と連携し、課題に即して対応する。	定期的に相談室に通い、精神的にも落ち着く。休学を経て、気持ちを切り替えて復学。	経済的問題等ではそれに対応した奨学金等の工面がうまくいった。家庭内の問題では、世帯分離などの対応。人間関係では、時間をかけて周囲の教職員が対応などで、退学せずに卒業ができた。	大学
		入学後から個別面談を実施しながら、常に学生へ声かけを行い心身の状況を把握している。専任教員と外来講師と情報交換をしながら、気になる学生を見守りつつ保護者面談を積極的に行っている。当校は、医療法人・社会福祉法人・学校法人があり、こころと体のヘルスケアセンターも設置されている。学生に対して細やかなケアを実施することが大切であることが分かった。外国人留學生は、アルバイト先との連絡体制を構築し、月1回はリモート会議を行い、学校側とアルバイト先の情報交換・共有を図り、留學生が安心して勉学に励むことができる体制づくりを強化している。	一番の原因は、家族の生活費に困り、就業しなければならなくなった。 次にメンタルの病気が再発し、学業の継続が厳しくなったこと。	個別面談を継続しながら、学生の個々にあったニーズを提供し、選択してもらった。 例：金銭的理由で退学した学生には、就職先の施設を紹介して就業しながら、実務ルートを経て介護福祉士国家資格取得をサポートするなど。個々の学生に合わせた対応をしている。	日頃から、学生に声をかけて状況を把握しているため、学生自ら相談することが多い。その結果、休学や退学する学生の軽減につながっていると考える。クラス全体で助け合う環境づくりが重要であるため、常にクラス担任は、学生とコミュニケーションを図り信頼関係につなげている。教員は毎朝のミーティング等を通じて、学生の情報共有に努めている。外来講師との情報交換・共有を大切にしている。	学生が不安に思っている早期発見が退学等を防止し、卒業することにつながったと考える。保護者やキーパーソン、学生と教員の三者で情報共有することが重要だと考える。	専門学校
		入学式の翌日、父親が病気で倒れて入院してしまったこと、医師から、職業への復活は難しいと言われたと相談があった。	本人より、退学して働かないと生活できないかもしれないと相談があり、経済的理由の退学が想定された。	1.学生さんと何時でも話せる関係をつくった。 2.学生さんに了解を得て、教員間で、状況を確認しつつ、不安な気持ちや相談したいことができるようにした。 3.事務職と連携し、給付型奨学金制度の手続きをお願いしました。事務職からご家族にも連絡が入り、納得した上で、手続きをしてもらった。	学生さん自身や家族も、継続意思があり、その後の状況を話に來たり、今後のことも相談してきたり継続している。経済的な面では、苦しい状況でしたが、家族や親戚の理解もあり、継続でき、この3月には卒業となる。	まずは、入学して間もない頃に、自分の状況を話に來てくれたことです。入学オリエンテーションでも、相談体制も説明しながら、誰でも声をかけて良いことも話した。また、教員間や事務職の協力もあり、継続出来ている。	短期大学